

樋口芳麻呂氏藏  
葉室頼業筆本  
『和歌一字抄』  
翻刻  
(四)

日比野 浩 信

(前号の続き)  
和歌一字抄下

催	閑	亡	勝	驚	閑	婦	遇 <small>逢</small>	過	客	
意 <small>情心</small>	染	碎	戴	興	未閑	不婦	不逢	招	友	
思 <small>憶述懷</small>	告	冒 <small>侵</small>	移	翫	待	尋	對 <small>向</small>	来	誰	
知	伴	凌	拂 <small>(ママ)</small>	愛	惜	傳	留	不來	獨 <small>孤</small>	
不知	談	踏	不拂	擇 <small>換</small>	悔	望 <small>眺望</small>	不留	臨	動	
不弁	契	結 <small>(毛才)</small>	荒	不擇 <small>無擇</small>	鳴 <small>啼</small>	見 <small>看</small>	宿	入	越	

忘	不忘 <small>未忘</small>	厭	未飽	交	比
寄	依	不依	及	纒	自
未遍	猶 <small>尚</small>	各	不改	不異	同
似	如	不如	每	皆	不定 <small>(マヤ)</small>
多	少	有 <small>在</small>	無	一	不一
不定	為 <small>作</small>	言志	即事	證哥	

(三行空白)「(毛ウ)

客 客依月来 三条大納言

忘にし人もとひけり秋のよは月出はこそ待へかりけれ

樹陰留客 顯季卿

あふさかの関ならねとも夏山の木の下陰も人はとめけれ

野花留客 俊頼朝臣

秋くれはやとにとまるを旅ねにて野へこそ常のすみか成けりれイ

行客吹笛 家經朝臣

笛の音は月にたかくそきこゆなる路の空にてよやふけぬらん

同座 藤經衡

旅人の吹ですくなる笛の音を待宿あらは来ぬと聞らん

同 長季「(五六才)

夕霧に笛の音はかりきこえつ、遠の里人いつち行らん

郭公留客 俊頼朝臣

たかためにたひねをすれは時鳥 さよふかすらん

卯花留客 源雅光

うの花の盛になれは山かつのかきねしもこそ過うかりけれ

依月客来 永源法師

我ひとりなかめてのみやあかさましこよひの月の朧なりせは

友 向花恋友 無名

花桜にはふさかりはかきたえて音せぬ人そ恋しかりけれ

同 同

花桜匂ふをあかすなかわれはたのめぬ人そいと、恋しき」(五ウ)

月前待友 藤原家經朝臣

秋よりもみるほとひさし夏のよの月には人を待へかりけり

春友 俊頼 花園左大臣イ

ちらぬまは花を友にて過ぬへし春より後のしる人もかな

雪中待友 同人

こぬもうしいさ、はまたし山里につもれば雪は友ならぬかは

泉為夏友 俊頼

たつの市のうるまのし水す、しくてけふはかひ有心ちこそすれ

虫為夜友 同

葵 秋のよをたれと、もにかあかすらん虫の音きかぬ人にとははや

月毎秋友 同（五九才）

葵 おもひくまなくても年のへぬるかな物いひかはせ秋のよの月

月旅中友 顕季卿

空 舟出してすまのうらにはよもすから月の光のさすところみれ

月旅宿友 忠命法橋

空 草枕このたひねにそおもひしる月より外の友なかりけり

月多秋友 定家

空 ちよふへき玉の砌の秋の月かはす光のすゑそ久しき

遇友恋月 西行

空 いまよりは昔かたりは心せんあやしきまでに袖しほれけり

松作千年友 經信卿

空 うへてみるちとせの松の木たかさ到我老らくのおもほゆる哉（五九ウ）

松週年友 顕季

空 千とせまですむへき宿のためしにと岩ねの小松けふそうへつる

松久友 俊頼

空 君もしる松も二はのむかしより久しくも代にすきにける哉

泉邊逢友 行宗

空 おもふとてさそふ泉の水ならば袖さしかはしまとゐせましや

誰

遠花誰家

坂上定成是イ

六二 よそなからおしき桜のほひかなたれ我宿の花とみるらん

卯花誰垣

太政大臣

六三 神山のふもとにさけるうの花はたかしめゆひしかきねなるらん

卯花誰家

俊頼 (三オ)

六四 なにかそのイ 友にかとふをのかかきねのうの花をみぬにてしるしもの、ふそとは

獨孤

獨聞郭公

藤原經衡

六五 我ならぬ人はねにけり時鳥き、やしつると誰にとはまし

月照孤舟

師賢朝臣

六六 みなれさほとらてそくたすたかせ舟月の光のさすに任て

獨尋花

西行

六七 たれか又花を尋てよしの山苔ふみわくる岩つたふらん

獨見月

有教母

六八 なかむれはおほえぬこともなかりけり月や昔のかたみなるらん

動

暁風動簾

行宗

六九 (マ) 夕くれはこす吹かへす秋風にをさふる袖のしとる成かな (三ウ)

越

越山見花

俊頼

七〇 白妙の花の梢にめをかけて入にし嶺をおりそわつらふ

夏日越聞

同

空七 夏くれはゆきかふ人を相坂の関はし水にまかせてそみる

過 郭公暁過 行宗卿

空八 あまの戸を、しあけかたの時鳥いつこをさしてなき渡るらん

招 花招客 永源

空九 堀うへしかひもあるかな桜花ゆきかふ人も過かてにして

橘為仲朝臣

空一〇 春ならぬおもにも人をとひしかは花ゆへとのみ思ひしもけし

来 依月客来 永源法師「(空二オ)

空一一 我ひとりなかめてのみやあかすましこよひの月の朧なりせは

客依月来 三条大納言

空一二 忘にし人もとひけり秋のよは月出はとこそ待へかりけれ

秋来水邊 藤原時房

空一三 吹風も岩もる水もす、しきは山川よりや秋は立らん

泉聲来枕 太政大臣

空一四 をときけはむすはぬ草の枕さへす、しかりける宿のまし水

水風晚来 顯季卿

空一五 夕つくよむすふ泉もなけれともしかのうら風す、しかりけり

樹陰風来 俊頼朝臣

空一六 日さかりはあそひてゆかん影もよしまの、萩はら風立にけり「(空一ウ)

不来 雖契不来恋 関白

空<sup>三</sup> こぬ人をうらみもはてし契をさしそのことのはも情ならずや

同 顕輔卿

空<sup>六</sup> 中／＼にたのめさりとはみちのくのとふのすかこも中にねなまし

臨 緑松臨池 惠慶法師

空<sup>完</sup> 誰にとか池の心もおもふらんそこにやとれる松のちとせを

柳臨池水 通宗卿

空<sup>三</sup> 青柳のうつれるかけを池水のそこの玉もと思ひける哉

毎日臨菊 朝 顕季

空<sup>三</sup> 菊のはな咲ぬる時はめかれせすいくあさ露の置てみつらん

臨老惜花 顕仲入道「(空三才)」

空<sup>三</sup> 老ぬれば我がよはひもあたなるにまつちる花のおしまるゝ哉

入 落花入簾 顕季卿

空<sup>三</sup> 桜花みすのまとをり入からにちりさへけさははらてぞみるイはさりけり

山月入簾 頼綱朝臣

空<sup>三</sup> あらにはや内もみゆらん玉たれの山のはいつる月の光に

同 藤原隆賢

空<sup>三</sup> あしひたくこやのこすには山のはの月より外は入人もなし

松聲入夜琴 斎宮女御

竈 ことのねに嶺の松風かよふらしいつれのおよりしらへそめけん

同 同

竈 松かせのをとにみたる、ことのねをひけは子日の心ちこそすれ」(三二ウ)

泉聳入夜寒 師賢朝臣

竈 さよふかき岩るの水のときけはむすはぬ神も涼しかりけり

虫聳入琴 行宗朝臣

竈 秋かせのことはをことにひきなせと聳ふりそふるのへのす、虫

遇逢 泉邊逢友 行宗朝臣

竈 思ふとちさそふ泉の水なくは袖さしかはしまとゐせましや

松樹遇春 新院御製

竈 とことはにはかはらぬ松もさしそふる若枝そ春のしるしなりけり

隔簾遇恋 同

竈 心あれやまはらにあめるみすた、み聳斗こそきかまし物を

不逢 違不逢(マモ) 俊頼」(三三オ)

竈 玉ゆかのおましのはし(ゆかい)にはたふれて心はゆきぬ君なけれ共

憑不逢恋金 顕國朝臣

竈 あひみんとたのむれはこそくれはとりあやしやいかに立帰る(らん)へき

對 對月惜花 相模

竈 夜のうちはちりをこたらは桜花月みて物はおもはさらまし



對花日暮 永源

空 さかりなる花のもとには春の日のくる、もしらぬ物にそ有ける

夕對卯花 資仲朝臣

空 月にこそふせやのすたれあけしかとうの花にまたおろされぬ哉

對水待月金 藤基俊

空 夏のよの月まつほとの手すさひに岩もるし水いく結しつ」(三ウ)

對泉述懷 俊頼朝臣

空 身のうきにしみかへりぬる歎をは玉井の水もえやは清めんきよ

對月待秋 懷円法師

空 見る程もなく明ぬる夏の夜に月につけても秋そまたる、  
(3)

對山待月金 土御門右府

空 有明の月まつほととうた、ねは山のはのみそ夢にみえける

同

空 此世には山のはいつる月をのみ待ことにてもやみぬへきかな

對月問昔裏書 定家

空 忘ぬすいやはしめもしらぬ空の月かへらぬ秋のかすはふりつ、

對家花思野 嘉言」(六四才)

空 わか宿にためしはかりの花みれは空をみてイにさかの、秋をしる哉

對菊惜秋 大江廣經朝臣

奏 うつりゆく菊をみてこそなけかるれいかにせはかは秋のとまらん

同座 源時綱

奏 心なき宿のきくたにうつろへはいか、はすへき秋はつるをは

留 墻柳留客 經信卿

奏 あをやきのいと、かきねになみよれば立くる人もたえぬ也けり

山花留人 祭主公長

奏 おの、えは木下にてやくたさまし春をかきらぬ桜なりせは

卯花留客 俊頼朝臣

奏 卯花の盛ならずは山里にくる人ことになかゝるせましや」(六四ウ)

同座 源雅光

奏 卯花のさかりになれば山かつのかきねしもこそ過うかりけれ

郭公留客 俊頼

奏 たかために旅ねをすれば時鳥またもななてさよふかすらん

野花留客 同

奏 秋くれはやとにとまるを旅ねにて野へこそ常の栖なりけれ

紅葉留客 素意

奏 故郷にとふ人あらは紅葉、のちりなん後をまてとこたへよ

留松聞鶯 國基

奏 き、すて、過しゆかねは鶯の聲は舟ちのとまりなりけり

残菊留秋 題季卿〔六五オ〕

冬に今は成ぬときけはたのまれす時とこそみゆる白菊の花

同 俊頼

おしまれて焼花咲秋もうつろへは菊をはえこそみすてさりけれ

樹陰留客 題(マ)

相坂の関ならねとも夏山の木下かけも人はとめけり

不留 来不留恋金 題季卿

玉津しま岸うつ波のたちかへりせな出ましぬなこりさひしも

同 俊頼

思ひ草葉末にむすふ白露のたま〜まては手にもたまらず

宿 露光宿菊 無名

かさしにはおらまほしきを白菊の花にやとまれる露(マ)やこほれん〔六五ウ〕

旅宿螢火 源雅光

よもすからほたるはかりはほのめけと人かけもせぬ草枕かな

旅宿待月 頼家

おほつかかな有明の月のいてねかしいかなる山のふもとなるらん

月前旅宿 題季卿

松かねに衣かたしきよもすからなむる月をいもみるらんやみるらんイかな

旅宿月金 三条大納言

空 我こそはあかしのさ(マ)とに旅ねせめおなし水にもやとる月哉

旅宿落葉 俊頼

空 吹はらふあらしと、もにたひねする涙(もともい)の床に木葉ちる也

旅宿時雨 瞻西上人(六六オ)

空 いほりさすならの木かけにもる月のくもるとすれば時雨ふるなり

旅宿冬夜 經信卿

空 旅ねするよとこさえつ、明ぬらしと(もたふい)はたそ鐘(し)の聲聞ゆる(マ)

旅宿雪 頭季卿

空 松かねにおはなかりしきよもすからかたしく袖に雪は降つ、

旅宿水蛭 行宗卿

空 日もくれぬすたく蛭をか、りにてあやしきうらに旅ねをやせん

旅宿暁鶯 無名

空 あけぬとていそきたつたのかけちには鶯の音や関の関守

婦 郭公欲帰 行宗卿

空 けふはさはこゑなおしみそ時鳥かへる山ちのかたみにもせん(六六ウ)

郭公帰山 俊頼(頭季卿イ)

空 時鳥二むら山を尋みんいりあやの聲やけふはまさると

帰路落花 頭季卿

空 家(にイ)よいはくものふるまひしるからん道さまたけに散紅葉哉

不婦

喚不婦

俊頼

空 こまなかれし(ママ)  
みかりのにかさるせしはしたかのこゑにもつかぬ恨をそする

尋 山家尋人 範永朝臣

空 なかれい  
たつねつる宿はかすみにうつもれて谷の鶯一聲そする

暁尋花

顯季卿

空 をきま  
夢さめていそきそきつる山桜朝吹風のた、ぬさきにと

處尋花

白川院御製(六七オ)

空 と  
春くれば花のほひにさそはれていたらぬ里のなかりつる哉

尋聞郭公

橘成之

空 と  
はるくといく田のもりに尋てそ山時鳥一こゑもきく

尋虫声

裏番 定家

空 と  
松虫のなくかた遠く咲花の色くおしき露やこほれん

傳 風傳隣花

坂上定成

空 さくイ  
桜ちる隣にいとふ春かせは花なき里そうれしかりける

人傳郭公

関白

空 と  
時鳥過つとかたる人ことにいくたひとひとつあかぬあまりに

望 望山花

範永

空 ふり  
かすみたつと山の花も咲にけり身につむ雪を春のけてかし(六七ウ)

山家望月

隆資

六五 諸友にすみ月なくは山里ひとりやイにいかてか秋のよをあかさまし

水邊望天河

兼澄隆イ

六六 君か代にはしめてすめる水なれはあまの河波立かよふらし

水邊秋望

經信卿

六七 もみちみしおりならねとも大井川秋のけしきの浅からぬ哉

山居夕望眺イ

隆俊卿

六八 いりしより都のかたをなかめつ、山のたかねにけふもくらしつ

野外秋望

定家

六九 むらさめの玉ぬきとめぬ秋かせにいく野かみかく萩の上の露

海上夕望

國基(六八オ)

七〇 よもすからいざりやせまし夕くれにおきつしまへにかよふあま舟

海上遠望

関白

七一 和田のはらこきいて、みれは久かたの雲井にまかふ(五)奥津白波

旅宿遠望

良暹

七二 わたのへや大江のきしに旅ねして雲井にみゆる伊駒山哉

野經眺望眺イ

顕輔卿

七三 ますらおかあさゆく野路をみわたせは雲井をかけてかくる(六)みなは

雪中眺望

関白

七四 紅にみえしこすゑも雪ふれはしらゆか(マ)くる神なひのもり

山居眺望 長家卿

と ありま山たひのひかすのゆくま、に昨日もけふもなかめをそする」(六六ウ)

野望草滋 俊頼

と むさしの、あしのおきふを分行は末はよりこそ空はみえけれ

見 月前見花 匡房卿

と 月かけに花みるよはのうき雲はかせのつらさにをとらざりけり

晚見藤花 俊頼

と 紫にいくしほそめて藤の花夕日さかきの灰をさすらんマイ

晚見野花 同

と くれぬとも花のあたりにやとりして秋は野守と人にいはれん

雪中見松 為義朝臣頼

と あまた年雪はつめとも我宿の松のみとりそかはらざりける

見花延齡」(六九オ)

と なかむれはおの、えさへそ朽ぬへき花こそちよのためしなりけれ

聞 山家聞鶯 經信卿

と 鶯の音こそ遙にきこゆなれこや山里のしるしなるらん

夜聞子規 俊頼

と あけはまつちらさておらん時鳥はな橘の枝になくなり

山家聞鹿 經信卿

秋ふかみ山かたそひに家居して鹿の音さへになけはかなしも

暁聞擣衣 橘為仲

あくるまでしてうつ聲のたえせぬは誰ためいそく衣なるらん

旅宿聞留 俊綱朝臣

草枕むすふね覚の笛の音に吹あはず也峯の松かせ」(六九ウ)

夜聞落葉 橘則季

よはに散をとはずれともみちはの色をもみねは時雨とそ思ふ

旅鷹聞雲 惠慶

ゆくくとくと雲路をならす鷹かねの常に旅とは思は(ア)りけりざらん

荒屋聞虫 嘉言

我宿はあさちかはらにあれぬれと虫の音さへそ取所なる

未(マ)聞郭公 顕季卿

夏衣たちきる日よりけふまては待にきなかぬ郭公かな

待 山家待花 同

足引のかた山きしに家ゐして嶺の桜の花待我は

對月待郭公 為義朝臣」(七〇オ)

かくてのみなかつ成なは時鳥月をのみみる身とや成(八)なんなは

待聞子規 顕季卿

夏衣たちにし日より時鳥ぬる、夜(マ)もなしにいまそ鳴なる



待草花 同

思ふとち露打はらひみにゆかん花野の萩のはやもさかなん

萩盛待鹿 白河院御製

かひもなき心ちこそすれさを鹿のたつ聲もけぬ萩の錦は

秋夜待月 三宮

秋のよの月は山路をいてねともかねて心に入にけるかな

田家待月 俊頼

はやくいて、門田にやとれ秋の月はほる露のかすやみゆると」(七ウ)

船中待月 嘉言

たかせ舟さほのたちともみえぬ哉月をのせてそ出へかりける

待秋夜月 六条宮

またちらぬさきに紅葉をみるへきになか月影の出かてにする

山家待春 頼家朝臣

山さとにあさけの煙たなひくを春にさきたつ霞と思はん

雪中待春 源能基 兵部少輔

雪ふかき山かくれなる鶯も我はかりこそ春としるらめ

待客関郭公 顕季卿

諸友にきかまし物を郭公たのめし人のはやきまさざなん

雨中待人 俊頼」(七オ)

雨ふりし日はあやにくにこし物をこはたれなれや音信もせぬ

花残待人 國基

尋くる人もやあるとあしひきの山下かけに花そのこれる

山家待春 經衡

梢なる雪をこそみれ山里は春立ほとの花によそへて

水上待月 頼資

石まゆくいは波たかしたかせ舟月いてはこそさしものほらめ

惜 老人惜花 範永朝臣

ちる花もあはれとみすやいそのかみふりはつるまでおしむ心を

老人惜春 俊頼朝臣 橘俊成 越中守

おひてこそ春のおしさはまさりけれ今一度もあはしと思へは」(七ウ)

夏夜惜月 輔親卿

夏の夜の雲路は遠く成まされかたふく月の行やらぬまで

同 曾杵好忠

あまの戸をあくるもしらすなかめつゝみねともあかぬ夏の夜の月

終夜惜秋 藤隆資

あけぬとも秋のなこりとみゆはかり雫たにしはし立とまら南

悔 悔離別 俊頼

いまさらにもかへさめやいちしるきあすはの宮にこ柴さすとも

梅會合 同

いにしへを思へはくるししめのうちにさかさすまはをかまし物を

鳴 鹿鳴秋萩 無名 (七三才)

下葉より物思ふ秋にいと、しく鹿の音をまつなきてさかする

旅鷹鳴雲 俊頼

はつ雁の過つる空のうき雲を鳥の跡ともおもひける哉

驚駭 花駭定心 永源

ともすれはよもの山へにあくかれて床におられぬ花桜かな

擣衣驚眠 俊頼

衣うつきぬたのおとに夢覚てことそともなくぬる、袖哉

郭公驚眠 藤原永実

まちかねてまところめは又きなく也人くるしめのほと、さす哉

同座 俊頼

またすてふ我名もたてし時鳥なきおこしつと人にかたるな (七ウ)

郭公驚夢 藤原定頼 所衆

まちかねてまところむ夢に郭公きくとみつるはうつ、なりけり

同 太政大臣

おとろかす聲なかりせは時鳥またうつ、にはきかすやあらまし

浪聲 源重之

志 此ひしきは夢にのみこそなくさむれつらきは波の聲にそ有けり

同 致親

志 うらちかくぬるかとするは白波のよる音にこそ夢さめにけれ

興 秋花催興 頭季卿

志 よと、もに野へに心やあくかれんもとあら萩(マ)のはなしちらすは

田家秋興 匡房卿(三才)

志 あきくれは(マ)さげの風のねを寒み山田のひた(イ)に任(イ)てそまき

同 仲實

志 夕されは芦のまろやにそよかれて門田の稻(ト)に秋風そ吹

同 俊頼

志 山田(シ)もるさそのふせやに風吹はあせつたひして鶉鳴也(ト)

河邊興 同

志 をかみ河かき(ア)のはひえにあゆつりてあそふもさめぬ(イ)そのこ思へは

翫 樹陰翫泉 贈左大臣

志 松か(ニ)ね(イ)もるし水むすふよはわか身ひとつに秋はきにけり

翫野花 師賢朝臣

志 さらぬたに心のとまる秋の、にいと、もまねく花す、き哉(三ウ)

翫池上月 白河院御製

志 池水のこよひの月をうつしてもて心のま、に我物(ト)に見る

翫宮庭菊 長房卿

翫 朝またきやへさく菊の九重にみゆるは霜のをける也けり

女郎(12)花 翫露 源仲正通イ

去 をみなへしけさはすかたのまさる哉露のむすへる玉かつらして

翫紅葉 經衡

去 日をへつ、ふかく成行もみちはの色にそ秋のほとはしらる、

翫明月 行宗卿

去 なこりなくよはの嵐に雲晴て心のまゝにすめる月哉

愛 毎年愛花 三宮(七四オ)

去 としことにちれば物おもふ花の色をみにといさよふ我心哉

擇撰 擇紅葉 宇治太政大臣

去 いつれをか心にとめんしくれつ、紅ふかくてるもみちはれるイははイ

同 藤兼房意

去 もみちははみな紅に成にけりいつれやしほに過てみゆらん

同以上有馬會 平棟仲

去 かつみてもあすかたつぬる紅葉哉れイきふよりあかき色は有やと

同 義通

去 紅葉はのうすきもこきもをのつから心のうちにわきてこそみれ

同 頼家朝臣

夫 かそふれは日のみ暮つ、いつれともわかれぬ山の紅葉をそみる」(七四ウ)

不擇無擇 月不擇處 經信卿

ま ひさかたの空にかゝれる秋の月いつれの里もか、みとそみる

同 顯季卿

ま 柴の戸も玉のうてなも空晴ておなし心にすめる月かな

花無擇處 同

ま いつくともわかぬ桜のはな、れは尋いたらぬくまのなき哉

勝 瞿麦勝衆花 家經朝臣

ま たつたひめことにやそめし春も秋もとこなつにしく花のなき哉

同 經衡

ま ちとせへん君そみるへき床夏に匂ひひとしき花は有共やしイ

秋依月勝 橘俊宗」(七五オ)

ま なに事に春の明ほのをとらましさやけき月の秋なかりせは

秋月勝春花 為義朝臣

ま みる程もなくて散にし花よりものとけき秋の月はまされり

落葉勝花 三条大納言

ま 花よりも心そとまるふかくさのかれの、うへにちれる紅葉は

戴 白菊戴露 藤成高西市正

夫 いつのまにむすほ、れてか白露のまたうつろはぬ菊にをくらん

庭草戴雪 範、永朝臣

表 おきのはにふりか、りたる雪みれば我もとゆひそ先しられける

同座 隆經朝臣

志 年ふかく庭の草葉も成ぬれば雪をいた、く物にそ有ける」(七五ウ)

- (1) 同歌、「日本歌学大系」では「又とも鳴で」とある。
- (2) 「晚」字、「口」扁に「免」のような文字。
- (3) 「程」字、旁が「尔」のような文字。
- (4) 「日本歌学大系」では「こゑきこゆ也」とある。
- (5) 「まかふ」、「まよふ」のようにもみえる。
- (6) 「み」字、「え」のようにもみえる。
- (7) この傍書「りか(里可)」のようにみえる。「丹鶴叢書」を参照した。
- (8) この傍書「なは」の左傍にある。
- (9) 「こ」字、「う」のようにもみえる。
- (10) 「原」の左傍に「匕」の見せ消子記号を削り消す。
- (11) 「ね」字、「手」のようにみえる文字。
- (12) 「郎」字、「良」のような文字。

(続)